大阪あちこち

●国宝「青磁鳳凰耳花生」

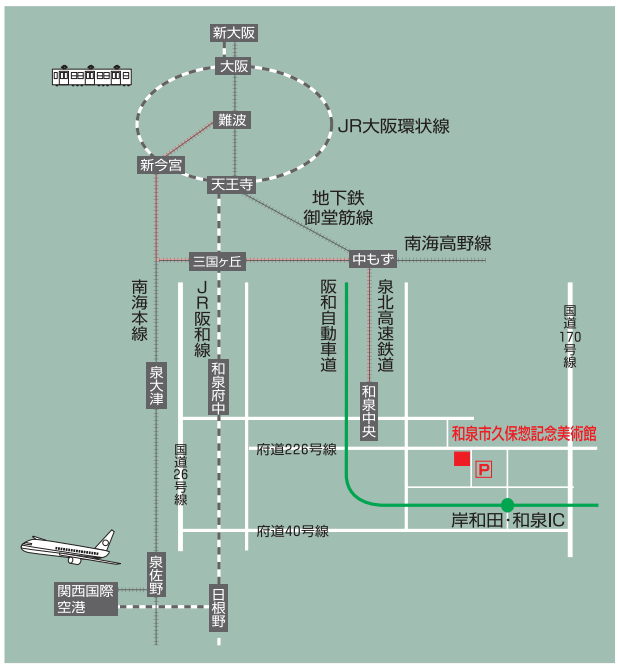
少し尖ったクチバシを持ち、すました顔つきで前方に目を向けている鳥。額の辺りの丸く盛り上がった部分は羽毛の塊を意味しているのであろう。首からも長い羽毛が軽やかに立ち上がっている。これは空想上の鳥の鳳凰を、頭から首、そして胸にかけて象(かたど)り、青磁の花生(はないけ)に耳のように付けられた装飾である。

この作品は、和泉市久保惣(くほそう)記念美術館が所蔵する「万声(ばんせい)」という銘で知られた国宝の「青磁鳳凰耳花生(せいじほうおうみみはないけ)」。中国の龍泉窯(りゅうせんよう)で南宋時代（12世紀）に作られた。ガラス質の上薬の下から、釉薬(ゆうやく)の青色の粒子が光を反射させ、天候によって色調が深くも淡くもなる。

日本では、鎌倉時代に中国から多くの龍泉窯青磁が輸入された。そのなかに含まれていた鳳凰耳花生で、国宝に指定されているものはこの作品だけである。唐物として珍重された中国渡りの磁器の名品としてきわめて有名である。

この花生は国が認めた宝物であるが、誰が作ったのかはわかっていない。中国の南宋時代、民間の窯場には飛びぬけて高い作陶(さくとう)の技を身に付けた職人がいたことは確かであるとしかいえない。国宝に止まらず、多くの美術・工芸品は名前の知れない人々の手で作られている。

目を凝(こ)らして細部をじっくり見てみると、職人のすぐれた技術や工夫など思わぬ発見ができて、「ほーう」とうなってしまう。工芸の世界では、歴史の表に登場しない人たちの磨かれた技が幾多の光を放っているのだから。



▼お問い合わせ先▼

和泉市久保惣記念美術館

TEL　0725−54−0001

FAX　0725−54−1885

ＨＰ　http://www.ikm-art.jp